

飛機、没有吗……

六月一〇日（木）午前七時前、日本人三人で連れ立って、格爾木人民政府招待所をあとにした。通りには人影も車の影もなく、果たしてバスが走っているかどうかも定かではないので、とりあえず火車站の方に向かって歩き始めた。途中で適当なミニバスか何かがあれば乗り込むつもりだったのだけれども、運良くすぐにうしろが箱型の乗客席になっている軽自動車の簡易タクシーがつかまった。交渉して、長途汽車站までひとり一元。

長途汽車站の待合室に入ったときには乗客は数人。出発まではしばらく間があったので、売店でパンとジュースを買って朝食にした。

出発時間が近づいてターミナル広場に出てみると、バスはボンコツだった。今までの経験では最悪のバスだ。しかも座席は三人がけ。折りたたみのパイプ椅子のような固い座席。ここに一二時間も座っていることになるのかと思うとすこしうんざりとした。待合室では数人だったけれども、出発までに乗客は満員になり、定刻にバスは出発した。

道路沿いにはしばらくは格爾木の砂にまみれてくすんだような建物があつたけれども、すぐにどこまでも平坦なツアイダム盆地の荒地が続く。砂漠というよりも土と石の荒地地で、四方八方見渡すかぎり何も無い。ただ枯草のような植物が荒地地を渡る風に吹かれているだけだ。

どこまでも単調な景色にすぐに眠たくなり、窮屈な座席でうたた寝をした。

バスは単線の線路に沿って走っていた。それは蘭州から省都、西寧を通り抜けて終点、格爾木へと至る青海省唯一の鉄道だ。格爾木からやがてはチベットのラサへと鉄道の延長が計画されているという話だ。

お昼頃に小さな街で昼食を兼ねた休憩。適当に三々五々街中の食堂へと散っていく。僕たち三人はとある小さな食堂へと入り、刀削面（二・五元）を注文した。固く練り上げた生地を刀のようなナイフで沸騰したお湯に削り落してゆであげるといふものだ。面はたっぷりとした量もあり、とてもおいしくて満足した。

昼食のあとは再びどこまでも続く荒地だ。しばらく前に雨が降ったらしく荒地の所々には水たまりが広がっていた。見渡すかぎり茫漠と広がっている荒地地の彼方には灰色の山影が見えた。道路はまっすぐどこまでも続いていた。

バスは単調なうなりをあげていた。すぐ近くには岩盤を露出した巨大な岩山がそびえていた。突然、バスはスピードを落とし、そのまま一時

停車した。見ると、ラクダの群れが道路をゆったりと渡っているところだった。道路の真中に立ち止まったまま動きそうもないラクダもいて、運転手は軽くクラクションを鳴らした。遠くには羊のような動物の群れが見えた。

やがて土と石の荒地は土と細かい砂の砂漠になった。これまでの舗装道路はただ整地されただけの地道になり、バスはその背後にもうもうと砂煙をかき上げながら走っていた。対向車があるたびに乗客たちはあわてて窓を閉めた。そうしないと対向車のかき上げた砂煙がバスの中にまで入ってきて、ひどいことになってしまふからだ。

半分干上がっているようにも思える大きな湖がはるか遠くに見えた。その湖面は塩を吹いたように白く輝いていた。湖ははるかに遠く、塩を吹いたように白く見えたのが湖面なのか干上がった所なのかは実は定かではない。しかし果てしない荒地のようにも思われる砂漠のはるか遠くに見える湖の姿は何か幻影のような魅力をたたえていた。

やがてバスはツアイダム盆地の北はずれにそびえる山地へと入っていた。標高が上がるとともに、気温は急激に下がり、まるで夕暮れのように薄暗くなった。道路におおいかぶさるようにして鉛色の岩山がそびえていた。すぐに雪が降り始め、岩山にも雪はまっ白に降り積り、まるで真冬のような光景に僕は凍えた。寒さに凍えるのはラサーゴルド間だけだと思っていた僕はまるで裏切られたかのように恨めしく降りしきる雪を眺めていたのだった。しかしそれも峠（当金山口。青海省と甘粛省の境にあたる）までのことだった。

峠を越えると、甘粛省。再び砂漠だった。砂漠というよりもむしろ土と石の荒地、土漠とでもいった感じだ。ただ青海省側よりも心なしか緑が多いような気がする。背の低い葉のどがった植物だ。あるいは枯草のような植物。

バスはいくつかの小さな街を越え、ずっと続く下り坂を駆け下りていった。そしてまた延々とした荒地を走り続ける。はるかかなたに砂漠の砂山が見えた。

やがて前方に、こんもりとした緑に包まれたオアシスが見えた。それが敦煌（トンファン）だった。

バスは敦煌の街中（というよりも村という印象だったけれども）のいくつかの地点で乗客を下ろしていった。青い人民服を着た農民という感じの人たちが下りる人たちを出迎えていた。村人たちの人民服を見て、僕はふと、また中国に戻ってきたのだという気がした。

敦煌のバスターミナルに到着したのは午後九時頃。あたりには夕闇が迫っていた。格爾木から約一三時間半。窮屈で固い座席に痛めつけられた体が軋んだ。

長距離バスターミナルは敦煌市街の南はずれにあり、なにか寂しい印象のするところだった。急速に迫ってくる夕闇に押し包まれて街はひっそりとしていた。店仕舞をした店舗。そしてひっそりとした明かりを歩道に投げかける食堂。夕闇の中にうずくまっているかのような低い街並に、すぐに目についたのは四、五階建てのホテルの建物だった。

バスターミナルを出た僕ら（日本人三人）は通りを渡り、飛天賓館へと入っていった。日本人のイメージとしては敦煌というのはシルクロードの街として有名だし、また名高い砂漠の石窟、莫高窟（モーカオクー）の街でもあり、僕はちよつと心配していた。中国へ戻ってきたとたんにまたメイヨー（没有）攻撃が始まるのではないかと。しかしフロントで尋ねてみると、空室はあり、三人部屋で一人一七元（F E C）。僕の方はそれでOKだったのだけれども、二人はすぐにはチェックインしようとはせず、しばらく考え、一人が近くにある西域賓館の方へと値段を確かめに走っていった。これだけ安いのに何が不服なのか僕には理解できなかったけれども、彼らに従い、しばらくロビーで待っていると、西域賓館（ゴルムドの招待所で二人連れの女性が教えてくれたホテル）の方は一人一二元（F E C）という報告。そちらの方にすることにした。

いったんチェックインしたあと、街中の食堂で食事をした。ビールを飲みながら話を聞いていると、二人はこれから新疆ウイグル自治区を経て、パキスタン、アフガニスタンをまわり、最終的にはインドへ行くつもりだということだった。年末までにはインドに着きたいということだったけれども、わずか数元のホテル代の違いにこだわるのも納得できるような気がした。ちなみに二人はともに三〇才前後。とりあえずヒゲとスカシと呼んでおこう。ヒゲはもちろん髭面のヒゲ。スカシはどことなく斜にかまえているからスカシだ。

ホテルに戻り、シャワーを浴びたかったのだけれども、時間が遅かったらしくて「没有」。シャワーはあきらめて部屋で休んだ。テレビでは中央電視台の放送の他にスターTVの録画を流していた。もちろん中央電視台の放送にも娯楽番組はあるのだけれども、どことなく垢抜けず面白くない。しばらくスターTVの歌番組を楽しんだのだけれども、番組が終わると中央電視台の放送に切り替わってしまった。チャンネルをかえても、あとは中央電視台だけ。テレビはつけたまま、僕は手持ちぶさたにそれぞれのベッドでそれぞれに戻る。スカシはベッドに横たわ

り、蘇州で一緒になったパンダがお土産に買ったのと同じ大理石(?)の玉を手のひらに転がしていた。

僕はノートに今後の日程を組み立ててみた。敦煌のあとは、嘉峪関―蘭州―西安―洛陽―北京―天津。今日は六月一〇日。七月には職場に戻る約束をしていたので、どう考えても切迫していた。敦煌には鉄道が通じていないので、どうしてもバスで嘉峪関までは出なければならぬ。そこですぐに鉄道に乗り換えるというのはたぶん不可能だ。そうなるにあとが時間的に厳しくなるし、嘉峪関は小さな街なのでウルムチ発の列車の途中乗車ということになる。蘭州までの長距離を硬座車両で、しかも席もないということになれば、これは悲惨だ。いつそのこと蘭州まで一気に飛行機で飛んでしまおうかと、僕は思う。ちよつとぜいたくだけでも、そうすればあとの日程がずいぶんと楽になる。ガイドブックによれば、蘭州までは週に数便ということだ。うまくいくかどうかは分からないけれども、とりあえず民航售票処にあたってみることにした。

※

六月一日(金)午前九時。西域賓館を出て、民航售票処へと向かう。途中食堂で朝飯に牛肉面を食べ、通りを北へ。十五分ほど歩くと突き当たりが人民政府。人民政府前の東西に走る通りは西大街、東大街と名付けられた敦煌の繁華街だ。とはいえ都会の繁華街とは違い人通りも多くはなく、また背の高い四、五階建ての建築物といえば、ホテルや百貨大樓、商場、あるいは政府機関や銀行などの建物くらいで、全体に風通しの良い街だ。朝の気持ちの良い空気を吸いながら東大街の東はずれ(つまり敦煌の東はずれ)にある民航售票処の方へと散歩気分歩いていった。

いかにもシルクロードの要衝、東西貿易の中継点として古くから栄え砂漠のオアシスといった敦煌の開放的な朝の景観に、心も軽く僕は歩いていった。すぐにガイドブックに示された民航售票処に到着!と思った建物は閉鎖され、シャッターが下ろされていた。

「あれれ：？」と思いながらその建物の前を行ったり来たり。シャッターのすきまから覗いてみると、確かに事務所のような感じなのだけれども、閉鎖されてから時間がたつらしく仕事をしているという雰囲気はない。営業時間前だからというわけではなく、本当に閉鎖されているという印象だ。誰に尋ねてみるということも思いつかないまま立ちつくし

ていると、售票処の隣に民航招待所という小さな看板を掲げた宿があり、そこから従業員らしい女性が出てきたのであわててつかまえて、

「僕は飛行機の切符を買いたいだけだ…」

と切りだした。女性はちよつと困ったような顔をして言葉を返したのだけれども、そのほとんどを僕は聞き取ることができない。ただわずかに聞き取ることができた単語は飛行機（フェイチャー、飛行機）と没有だけだった。しかし分からないながらも二つの単語をつなげると、飛行機はない！ 目論見はもろくも崩れ去って、僕はその場に立ちつくしたのだった。

一瞬目の前がまっ暗になったのだけれども、よく考えてみると、飛行機がないなどというのは変だ。どう考えてもありえない、と思い返し、僕は気をとりなおして售票処の近くにある敦煌賓館へと向かった。敦煌賓館にはC I T Sがあるはずだったからだ。そこで尋ねてみれば確かながことが分かるだろう。

敦煌賓館は敦煌一のホテルですぐに見つかった。フロントでC I T Sの場所を尋ねると、ここではなくて汽車站の近くに移転したという答え。なんと西域賓館の近くだ。仕方がないのでその服務員に、

「飛行機はないのですか？」

と尋ねると、

「没有！」

それから僕にはほとんど聞き分けることができない説明をするのだった。

ともかく、飛行機が没有なのは確かそうなので、とりあえずホテルの方へ戻ることにした。飛行機がダメならば嘉峪関經由で蘭州に向かう他はないので汽車站を覗いてみるつもりだった。

東大街、西大街とたどり、人民政府のところを南へ。二〇分も歩けば西域賓館はすぐ近く。つまり敦煌の街はそれほどの規模だ。

ふと、小さな本屋を見つけたので、中へ入っていった。雑誌が中心で、きちんと製本された本は数えるほどの小さな本屋さん。敦煌の地図を買うつもりだったのだけれども、いくつかの地図を物色していると、そのうちのひとつに飛行機の運航表が記されていて、僕はショックを受ける。とともになんとなく喉元にひっかかっていた疑問がふつとんでしまったのだった。つまり敦煌発着の飛行機は、一部の都市からは七月から、他の多くの都市からは八月からの夏季にしか運航はしていないということだった。疑問が氷解してすっきりする一方で、敦煌のような観光地に今のような良い気候のときに飛行機が飛んでいないというのはどうにも納得できない気分だった。

ともかく飛行機が利用できないことははっきりしたので、ホテルに戻る前に長途汽車站の售票処を覗いた。とにかく敦煌から出るためにはバスを利用するしかないのだ。

がらんとした售票処に足を踏み入れて運航表を眺めていると、思いがけず蘭州行きの便が目に入った。バスで嘉峪関に出て、それから列車かと、漠然と考えていた僕は急に元気になる。飛行機に比べるともちろん乗車時間は長いけれども、一気に蘭州まで行くことができる。敦煌―蘭州は一日に一遍。朝出発して、次の日の朝には蘭州に到着する。窓口で明後日の便を予約できることを確認してから、八二元のチケットを買った。

ともかくにも敦煌からの足を確保した僕は心も軽く西域賓館の方へと向かった。と思うまもなく、ホテルの方から歩いてきた二人、ヒゲとスカシに出会ったのだった。食事がてら敦煌の街をぶらつくということだったので、すでに朝食はすませていたけれどもつきあうことにした。

汽車站近くの小さな食堂で、ヒゲとスカシは掠面（一・五元）を注文した。日本でいえば冷面にあたる食べ物だけれども、具はほとんどない。二人が食べるのを見ているのも芸がないので、僕はジュースを注文した。ビンの再利用のためだろうか、ビールビンと同じビン入りのジュースで、味はオレンジの炭酸飲料。

食事のあと、いましがたどつてきた道を再び繁華街の方へとぶらぶら歩いていった。長途汽車站や西域賓館のある丁字路は庶民的な通りで、ときおりホテルなどの大きな建物がある以外は小商店などが並んでいるだけだ。丁字路を北の方へとたどり、西大街に近づくにつれて通りは繁華になり、大きな商場や百貨大樓の建築が目立つようになる。とはいっても、都会の繁華街に比べるとつましいものだけれども。

時間もお昼近くになり、さつき通ったときよりもずっと人出の多くなった繁華街、西大街、東大街を僕は歩いていった。

スカシは途中に見つけた写真屋でフィルムの現像を頼んだ。現像焼き付け合わせて三六枚撮りで約二五元。どんな出来になるかあてにはならないけれどものは試しだ、とスカシは言っただけだけれども、僕もかなりな量のフィルムの焼き付けを中国ですませてしまおうかと思ったのだった。

商場や百貨大樓があるたびに、彼らはその中に入っていく。ガラスケースにおさまったウォークマンやラジオや電気カミソリ、あるいは様々なお菓子や日用雑貨をひとつずつ物色しながら歩いていく。彼らとともにゆつくりとウインドショッピングをしながら、僕はふと一か月も中国

にいてこのようにゆっくりとウインドショッピングをしたことがないの
に思い当たる。

商場を行き交う人々のざわめきをゆっくりと泳ぐように歩きながら、
僕は僕の中のある種の緊張が解けていくような気分を感じていた。それ
は中国とは異なる文化を持つチベットの旅行を終えたということから来
るのかもしれないし、ラサからゴルムドを経て敦煌に至るかなり厳しい
バス旅行を乗り切ったということから来るのかもしれない。ともかくあ
る種の緊張が解けて、この心地良いリラクソスの状態で、僕はしばらく
は敦煌の観光を日本人三人で楽しもうと考えたのだった。幸いにも気配
りをするタイプのヒゲがそのことを申し出てくれたし、スカシの方も別
に嫌がる風でもなかった。

東大街に面した大きな市場の露店食堂で軽く昼食。それからさらに東
へ、朝に行った民航售票処の方へ。このあたりには観光客目当てのお土
産物の店が軒を並べていて、とても楽しい。敦煌名物「飛天」などをモ
チーフにした織物や染め物、様々な細工物、写真集や絵葉書、あるいは
ラサの八角街で見かけたような装飾的な仏具など。飛行機が飛んでいな
いということもあるけれども、敦煌は今も観光の季節ではないのかわもし
れない。どのお土産物の商店にも閑古鳥が鳴いていて、そのぶん僕らは
ゆっくりと冷やかしてまわることができたのだった。

結局、買い物はお土産物屋で「敦煌の伝説」という題の日本語（！）
の本（一五元）、新華書店で「中国交通地図」（四元）、それにネスカ
フェインスタント（一杯分のパッケージにコーヒーと砂糖とクリームが
入っているタイプで、少し高いけれども喫茶店というものがほとんどな
い中国では重宝する。一二元）だった。

帰り道に繁華街の一角の雑居ビル風の建物に「文化茶園」という看板
を見つけた。ビルの二階あたりからは中国風の賑やかな音楽が流れてい
た。興味を引かれたので、休憩がてらビルの階段を上っていくと、その
ビルは文化会館という印象で、サークル活動のための部屋などと並んで
「文化茶園」があった。扉を開けると、客席はいくつかの丸テーブル。
学芸会のような舞台では、胡弓と大小の拍子木、ドラという編成の演奏
に合わせて、京劇風のかん高い発声の劇曲の朗唱。

一見して隣近所の仲良しという印象の茶園で入りづらかったのだけれ
ども、元気の良いおぼさんの勧めで丸テーブルについた。どのようなお
茶なのかかいかも見当もつかないけれども蓋碗（一・五元）を注文。し
ばらくして出てきた蓋碗はふたを取ると中身は氷砂糖と何かの木の実に
ボトルからお湯を注いでしばらく待っていると、木の実のお茶に砂糖が
溶けてとてもおいしい甘いお茶になる。舞台（とはいっても天井から二

本のマイクがぶら下がっているだけだ)の上には「劇曲芸術 繁栄昌盛」のスローガン。ひとりが歌い終えると、客席の顔見知りが指名されて舞台に立つ。どこにでもいそうなおばさんで、ちょっと照れ臭そうなしぐさを見せるのだけれども、いざ曲が始まるとこれがとても上手。キンキンとした声を張り上げて歌うのだった。

かつての西域への入口、シルクロードの街、中国からいえば西の果てにあたる敦煌でこのようにいかにも中国という情景を目の前にして、僕はふと不思議な気分に包まれた。そしてもしかしたら砂漠に囲まれたさいはての街だからこそ、人々は自らの文化というものを大切にしているのかもしれないと思う。

西域賓館への帰りに汽車站に立ち寄り明日の千仏洞(莫高窟)へのチケット(往復五元)を購入。

ホテルの部屋でしばらく休憩したあと、夕方には鳴砂山へ行くつもりだ。